2021年1月20日(水)午後
オンライン（前半）

合同分科会　2020年度会合

ニュー・ノーマルが描く世界のリデザイン

特別講演
「オンラインにおける合理的配慮について -これからの教育はどうなる？-」
坂井　聡氏　香川大学

教育の中でのICTの活用の可能性を考えています。

当然、子供の能力には生まれつきの差があって「全員に同じ、平等な教育」では当てはまらない子供がいます。

「劣る能力を伸ばす教育」を押し付けると、無気力になってしまったり、不登校になってしまうだけで、それが本当にその子のための教育と言えるでしょうか。

私は「障害」という言葉を「普通より劣る能力がある」という意味ではなく、「劣る能力を補う環境を持ってない」と捉えています。

ICTでその不足した能力をカバーする環境さえあれば、人は普通に過ごせます。

コロナ禍で導入されたオンライン授業では、学校へいけない子供が授業に参加できるようになった例があります。

●3人のサッカーを観る少年。私の考えるICT教育の図です。

●文字を書けない子供もPCを使って文章が書ければOK！

●寝たきりの子供がオンラインにより授業を受けることができました。

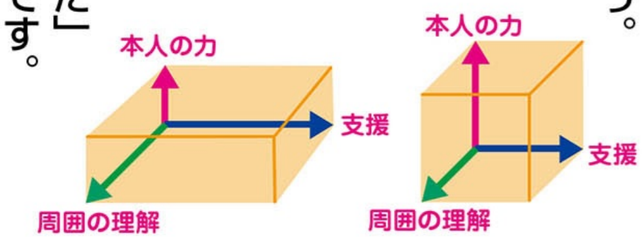
「どんな環境を用意すれば良いか」を今後、試行錯誤しながら準備していくことになります。

これは個人の能力に合わせることなので、簡単ではないでしょう。

大切なのは「周りの理解」だと思います。

「特別扱いをする」ことが、「ずるい」と思われないような環境作りが重要です。

「特別扱いで、個人の力を伸ばしているんだ」と理解して欲しいのです。



●能力を分かった上で、同じ体積になるように環境を用意します。

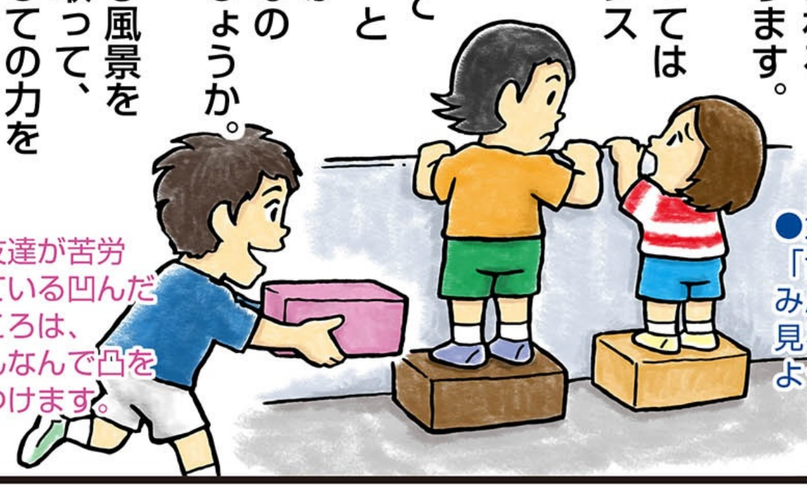
●まず、子供一人ひとりが何に悩んでいるか…。

オンラインによって集団の授業の形から個別になり、人との対面が苦手な子供が教育を受けられるケースがあります。

この子にとってはすごいチャンスです。

教育により「生まれてきてよかったな」と思えることがまず、一番なのではないでしょうか。

みんなと同じ風景を見て、感じ取って、初めて人としての力を発揮できると思います。


●友達が苦労している凹んだところは、みんなで凸を見つけます。

●力の差に合わせて「台」を用意すれば、みんなで同じ風景を見ることができるようになります。

特別講演
「Society5.0の実現にむけたまちづくり -「スマートシティ会津若松」の取組とビジョン-」
鵜川　大氏　会津若松市

「スマートシティ会津若松」の紹介をさせていただきます。

会津若松市は東京から新幹線、在来線で2時間半ぐらいのところに位置しており、産業は観光、農業、ICT関連産業が柱となっています。

人口の減少が早急の課題です。

会津大学ではICTを専門に学ぶことができて、県外より多くの学生が集まっているのですが、卒業生の約8割が県外へ就職しています。

●豊かな自然に恵まれ、農業、酒、漆器等の地場産業があります。

●学生は集まるのですが、就職は県外です。

「スマートシティ会津若松」では、ICTをあらゆる分野で活用して、新しい雇用を産み出し、市民の生活の利便性を高め、取得した情報を見えるようにすることで、住みやすい、住み続けたいまちづくりを進めています。

- ●産業振興を含めた「地域活力の向上」を図ります。
- ●「安心して快適に生活できるまちづくり」を進めます。
- ●「まちの見える化」を図ります。

情報提供プラットフォーム「会津若松＋（プラス）」を紹介します。

これは個人の属性に合わせて、地域からの情報を提供するサービスです。例えば、小さいお子さんのいる家庭には、子どもと一緒に遊べるイベント、児童手当のお知らせなどといった情報が優先的に表示されます。

また、会津若松市では、冬の除雪車の位置情報をリアルタイムに配信していて、市民が確認できます。

ヘルスケアについても、健診結果の見える化、生活習慣病のリスク分析を行うなど、市民の生活に役立っています。

データの利活用の推進により、市民、地域、企業のあらゆる主体が恩恵を受けられることを目指しています。

データの活用にあたっては、「自分のデータは自分のもの」であり、自分の意志（同意）によって、自分が使いたいときに使いたい所で利用することで、自身の生活の利便性が高まる」という「オプトイン」の考え方が前提です。

スマホやPCを持たない市民にはテレビを通して情報提供を行ったり、センサーにより取得した土壌のデータを農業に活かしたり、防災、減災への取組も進められています。

また、ICT関連産業の集積拠点として、ICTオフィス「スマートシティAiCT」が開所し、まちの賑わいが創出されるとともに、首都圏企業と地元企業の連携が始まっています。

●自律飛行型ドローンによる農薬、肥料散布支援

●健康情報をスマホで確認

●除雪車ナビ

●個人の属性に合わせた情報提供

＊講演では、もっと多くの取組を紹介していただきました。

2021年1月20日(水)午後
オンライン（後半）

合同分科会　2020年度会合

ニュー・ノーマルが描く世界のリデザイン

特別講演「宗教と現代社会」-東洋思想とWel-being-

川上　全龍氏　春光院

このコロナ禍で人の日常も変化し、そのために苦しんでいる方もいれば、逆に人に会うのが苦手な方は気分が楽になってるという場合もあるそうです。そうなると、人の幸福(Well-being)って何だろうということになります。

●妙心寺春光院の副住職をしております。

禅で重要なのは「無我」ということです。それは、「自分とは何か」が禅の中心であるということです。

●達磨（実在）の追求とは「あるがまま」の追求です。

この「自己」の捉え方は西洋と東洋では逆です。

西洋では「自己」は独立した存在で、「自己」という物が存在するという考えです。東洋では「自己」という物は独立して存在しません。知覚、認識、環境、思考、身体の繋がり（間）の中に存在するのであるという考えです。

●西洋の考えは、自分という物が独立して存在するから鏡で自分を観たり、触ったりできるもの。

例えば「川」は状態ですが、コップですくうと「水」という物となります。この捉え方の違いが、幸福（Well-being）の「在り方」の違いになると考えることができます。

●「自己」は本来状態で捉えるもので、物として捉えると「自我」になります。

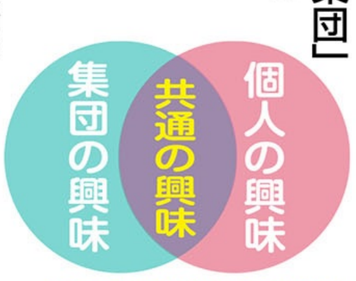
西洋のWel-beingは、過去は《混沌》とした状態であり、人間は現在から未来へどんどん進歩していき、「今と違うものになる」という意識があります。

東洋だと時間軸は関係がなく、今が常に《渾沌》の状態であり、幸福だと感じた時には、次は不幸になるはずだ、と不安になります。幸、不幸の小さい繰り返しが安定していると考えます。

●西洋的には「今は良くない」未来は「もっと良い」

●東洋的には「幸福は少し揺れ動く方が良い」

これは「個人」と「集団」の捉え方によっても変わってきます。



●共通の興味の割合が捉え方に影響します。

レストランで、ある家族の子供が歌い出しました。東洋的には「他のお客の食事の迷惑になる」と考えるところですが、西洋的には「子供が楽しいなら問題ないでしょ」という見方があります。世界の別の地域では、もっと違う解釈もあり得ます。

●個人主義で「子供だから許される」という考え方も一つの基準です。

世界的は基準で「答え」があると、つい、それに飛びつきたくなりますが、自分の基準でWel-beingを考えることが大切です。本当の幸福って何だろうと、よく考える癖をつけておくと良いと思ってます。

●世界に合わせることが一番なわけではありません。

特別講演「瞬間移動サービス「アバターイン」が描く未来」

深掘　昴氏　avatarin株式会社

ANAグループのavatarin社の遠隔操作ロボット事業の紹介をいたします。

車輪で移動できるロボットを遠隔地からパソコン等で操作し、人の代わりとなって行動する「アバター」として使用します。「人間拡張テクノロジー」を目指しており、「全ての人」が使えることが重要だと考えています。

●シンプルなロボットですが、人の代わりを務めます。

発想の原点は「問題が解決できないのは、解決できる人がそこにいないから」というものです。離れた場所にいてもコミュニケーションが取れるならば、あらゆる可能性を広げられるはずです。

アバター開発を目的に立ち上げたプログラムとして、ロボット開発賞金レースを設定しました。競い合うことで15年かかるものが5年で実現可能となります。また、人間が行けない所ということで、宇宙へ目を向けています。それに加え、社会インフラへの利活用を計画しています。

①国際賞金レース	XPRIZE
②宇宙開発	AVATERX
③社会インフラ	社会実装

●トラブルの現場に解決する知識を持つ人間がいると助かります。

いくつかの活用事例です。まず、地方のお店に置いてみました。世界中から買い物ができるのはネット販売と同じですが、店員が丁寧に対応しますので非常に好評です。

●店員さんとの対話が楽しい買い物となるようです。

水族館、美術館、博物館とは相性が良いようです。動画と違い自分の見たいところを見られることや、時間の制約がないので、夜寝る前にちょっと見にいくとかもできます。

●お気に入りのマナティに毎日会えます。

また、病院へのお見舞いにも効果を発揮しています。患者さんは寂しい思いをしていますので、アバターの存在感が癒しになるようです。

●コロナ禍では特に効果を発揮します。

研究会等の会議にも使われています。人の中にアバターが混ざって行いましたが、非常に盛り上がった会議となりました。アバターでの参加者も違和感なかったとのことです。

●10台のアバター参加者を交えて会議が進行して行きます。

ロボット自体も細かい作業ができるように進化しています。

近い将来には街中にアバターを設置し、それらを自由に何にでも使える「アバターシティ」の構築を目指しています。

●「出来ること」が増えると可能性が広がります。